

の 末 年 学 児 才 三

村 石 京 子

この課題に沿って考えるとき、思いは当然三才児の入園当初の姿と現在のそれとの比較ということになってくる。

1、入園当初のころ……

私のうけもった三才児のクラスは全部で十六名、そのうち男児は八名、女児は八名の組編制で、生年月日は七月から二月までの子どもたちであった。

入園当初のことを思い出してみると、なによりもひとりひとりの子どもが家庭の生活から離れて、園の生活に慣れさせることに随分と手をやいたものであった。二月生まれのS子は、来る日も来る日も朝登園し

てから帰りの時間が来るまで、一月以上もの間シクシクと泣き続けていた。その時期がやっと過ぎてからは、今度は教師を母がわりにして頼りにしたのであろう。

片時も教師のそばを離れない。ついには、私がお手洗に行ったときはその入口で待つというほどであった。同じく二月生まれのI子は、年令の近い兄二人の環境の中で育ったせいも、断然行動派である。ほしいものは腕力をふるってとろうとし、相手がはなすまいとがんばれば、平手打でいくといった状態であった。八月生まれの男児Yは体格もよいが、その泣声の大きいことといったらまた並々ではない。部屋の入口に立つときはもう幼稚園の廊下中響きわたるような泣声をたてている。Yを送ってきた母は後髪をひかれる思いだが、そんなときには、思い切って母親には帰っていただくが、Yの方はどうしてどうしてあきらめるものではない。金切声を立てて母を呼ぶので、私が「お帰りの時間が来ると、お母さまはちゃんと迎えに見えますよ。」と納得させると、今度は「それまで玄関で待つ

よ。」と言って幼稚園へ玄関先からはこども動かない。無理に誘えば、耳もつぶれそうな声でゲンカン、ゲンカン、と泣くしまつてであった。さらに月経て、部屋中でやっと過ごせるようになって、幼稚園で望ましいとされる集団の生活には、全くのレジスタンスばかりおこなって一学期を送った。その他、いろいろな特徴をもった子どもたちがいた。

2、三つの保育目標をつくって

こんなわけで、その子どもたちをあずかる受持として、四月入園当初に今年度三年保育の目標として次のようなことを考えた。

I. ひとりひとりが幼稚園の生活をじゅうぶんに楽しむようになること

II. (幼稚園に来る子どもの中では最年少であるけれど)できるだけ自立性ある行動をとるようにすること

III. 教師としては、ひとりひとりの個性を尊重すること

まず、第Iのひとりひとりが幼稚園生活をじゅうぶんに楽しむという面をみよう。

来る日も来る日も悪戦苦闘のようだった一学期が過ぎて、二学期も中ばを過ぎる頃からは、教師と大部分の子どもたちとはいっしか仲のよい友だちとなり、朝、部屋へ入って来るときの緊張と不安の入りまじった表情がとれて、親しみのこもった朝の挨拶を交すようになった。まだ幾人かは送ってみえる親の挨拶の声ばかりで、子どもはいっこうお早ようと言わないけれど、それでもよい。子どもの表情は明るくて、さつきまであそんでいたその続きをまたはじめるような気安いようすで「何してあそんでいるんだい、ぼくもいれてね。」と友だち集団の中へはいって行く。こうして幼児の一日の生活ははじまり帰りの時間がくるまで、三才児の一日はあそびにあげ、あそびに暮れる。しかし、十六人がみな幼稚園生活を楽しんでいられるだろうか。そのことに非常に積極的な態勢ができている子どももいれば、やや受身であり友だちにひっぱられた感のする者もあるけれど、それは個人個人の性格のちがいがらもくることであり、全員皆均一ということはありえない。しかし、四

月には登園をしぶってばかりいた子どもでもさえも、ある日は帰りの時間の来たことを告げられて、「え、もう帰るの？ いやだな」。それじゃまた明日続きしてあそぼうね」と友だち同志で明日を約し、ある日は幼稚園を休んだ子のために、「どうしたんでしょね。かあいそうね、みんなとあそべないわね。」と同情する。あそびの状態はと見れば、全員で一つのグループを結成してにぎやかに騒いでいるかと思えば、次の場では三々五々各々の興味のあり場所によって、小さなグループに分かれてあそんでいる。またある場合は、ひとりでじつくりと積木をしたりしていることもある。このように種々の場面が次々と展開されているが、まったくみな幼稚園でのあそび、それもだんだんと多くなった友だちとのあそびにひたりきっているこの頃である。

次に第Ⅱの目標についてであるが、これについては少し説明を加えなければならぬ。いったい、幼児に対して自立性ある行動をするように要求することはかなり無理な面がある。ものごとに対する思慮、ふん

べつがなく、衝動的に行動するのが幼児の大きな特徴だからである。だがそれを承知の上で、私はあえて自立性ある行動をすることを目標にえらんだ。それは手の届きすぎた家庭から出て来た子どもたちは、予期した以上に自分でものごとを解決する意欲が乏しく、ささいなことでもすぐに頼る気持が強くて、自主的に物事を判断するという面にかけていることを痛感したからであった。「できなくてもよいから自分でやってみてごらんさい。」「自分で考えてやってみて。」と一応子どもをつきはなしてみた。これは子どもにははじめての経験でとまどうことが多かったが、性格形成の時期として大切な幼児期から、最少限可能な範囲のこととは自分でやろうという気持をもち、自分の行動に自分で責任をもつ気持の芽生えをさせることが必要であると感じた故に、あえて試みたのであった。ただし、これには決して要求を高くもったり、平均的なあるひとつの固定したものだけをもってはならないと、しばしば私自身をいましめ反省しつつ過ぎてきた。年令に応じた要求という

よりか、むしろ個人個人をよく知って個人に応じた要求をもつということが、この考への礎におかれるものである。

そして現在、子どもたちは出来ないことを恥ずかしいとせず、むしろやろうとしないうことの方を恥じる気持をもっているように思う。「むずかしいけど、やってみよう。」この子どもたちの意欲、そしてやりおえたときの自信にみちた満足げな表情、これこそ私のねがっていたものであった。

第Ⅲの目標については、これは教師の側から見た目標であり、いつも理想とするところだけれど、なかなか大勢の集団になると実行しにくいこともあるので、三年保育の特権とさえも思っただけで強く実行に心した。例えば製作に例をとってみれば、人形一つ作る場合にも教師のプリントしたそれは皆画一化された表情だが、子どもが書きいれた人形の表情は一つひとつ異なってそれぞれ個性的な表情である。目が小さくて恥ずかしそうな顔のもあれば、しょうきさんのようにいばって我こそはというような表情のものもある。この人形一つでも子どもの喜び

があり、願いがこめられており、皆個性がある。まして、家庭から出たばかりの三才児

は実に強い、ひとりひとりかけがえのない個性をもって幼稚園にやって来た。これを一組の規律はいるが、それ以上の制約によってある一色にぬりつぶされないようにいつも念願した。そのために、あたり前のことでしかないが、十六人各々の個性を知るためにひとりひとりの子どもと深く知りあうことを努力して、一学期も二学期も過ごした。陽気で活潑だが乱暴な子ども、非常に繊細な神経をもっている子ども、リーダーシップの強い子ども、ひとりで長い時間かけて何かうちこむことの好きな子ども、あまつたれやさん、おとなしいけれど優しく素直な子ども、うたったりリズムに合わせてあそんだりするのが大好きな子ども、人前で話すのが苦手な子ども、みんな違う、十六人十六様である。実にさまざま個性をもった子どもたちの集合体、これが一組を

結成していた。こうして集まった子どもたち、組単位でおこなうあそびの社会的経験もさることながら、十六人の子どもたち

ひとりひとりの興味を重んじ、個人を尊重することにあけた。

その点、三才児は幼稚園に来るときに、からをもつて来るということなく、教師への信頼感さえもつようになれば無邪気に自分をみせてくれるので、子どもの側からも教師の計画に対して協力的であったとさえいえるかもしれない。こうして学年末も近づいた今日、子どもたちはみな、そのよい持味を活かして組の中で自由に伸び伸びと楽しげに生活している。

3. 「個人」としての子どもから「集団」

としての子どもの生長へ

しかし、これは三年保育の一年間の姿ではない。幼稚園の生活全体からみれば、三才児の発達段階は「個人」としての子ども

の生長であったと思う。こうして生長していく子どもたちが、やがて次の年を迎えたとき個人中心の個性ある姿から、やがては集団の中での一員としての協力ある態度を自らもつてくれるように心の発達生長があることを心から望んでいる。

(お茶の水女子大学付属幼稚園)